謝意がこもった最後のひと言に介護の達成感

16歳の時にお母様を急性白血病で亡くし、以来、お父様と二人きりで生活していた山口さん。2006年9月に父を亡くすまでの4年間、アルツハイマー型認知症の父との介護生活を綴った著書「女ひとりで親を看取る」(ブックマン社)を2008年1月に出版。その後、講演などでご活躍中のさなか、2012年3月7日に心不全で急逝されました(取材は2012年2月28日)。

1960年9月20日、横浜市生まれ。大学卒業後、美容メーカーのエスティローダーでマーケティング、ワーナー・ブラザーズで社長秘書を経験。その後、通訳を経て、テレビ朝日のCNNキャスターとして芸能界デビュー。1987年にフジッコ・漬物百選のテレビCM「しばづけ食べたい」の台詞で一躍脚光を浴び、タレントとして数多くのテレビ番組等で活躍。タレント引退後は、横浜中華街では輸入雑貨店「グリーンハウス」を2011年5月まで経営する傍ら、父親の介護を通して学んだ経験をもとに、多くの講演会やトークショーに出演した。

山口 美江さん(故人)

高校卒業後に商社に就職した後、兄とともに貿易会社を興し、数字の達人でバリバリと仕事をこなしながら、夜ともなればおしゃれなスーツを着こなして横浜の繁華街に繰り出していたダンディだった父。その父が1998年、68歳で仕事を引退した後、「あれ、歳かな」と気付き始めたのが2001年の夏頃でした。暗算でこなしていた計算を電卓に頼るようになり、薬の仕分けに手こずり、「あの人誰?」と聞くようになった。

物忘れや面倒くさがりは、人が老いれば誰でもなります。さほど気にせずに過ぎていた平穏な生活に、衝撃的な出来事が起こったのが2004年夏でした。早朝、突然に上下のスーツにネクタイまで締めた姿で玄関先をほうきで掃除をしている父を目撃しました。覗き込むと顔色は青ざめ、口元には一筋のよだれが垂れている。「どうしたの?」と問うと「これから仕事で出張に行く」とたどたどしく口走る。え? 引退して6年も経つのに……。こんなショッキングな父の姿を目の当たりにしてから、「アルツハイマー型認知症」との診断が下されるまで、1週間もかかりませんでした。

名古屋の外国船に、バナナ800キロ積んでくれ

その日は早速、主治医であるMクリニックのT先生のもとに連れて行き、父の様子を診てもらいました。するとT先生は間髪置かずに脳血管の専門病院に連絡を入れ、検査の手配をしてくださいました。3日後の検査結果では、父はアルツハイマー型認知症が進行しているとのことでした。先日の異常行動は、発症によるもので風邪薬を計90錠も飲んでしまった結果だったこともわかりました。アルツハイマーは初期の段階だが、今のところ特効薬もなく手術して治るものでもない。当分は、経過観察しかないとのことでした。

しばらく小康状態が続き、05年8月には要介護1の認定を受けました。しかし、その頃からアルツハイマーの進行が早くなり、頻発する徘徊が厄介になりました。加えて翌9月には、急に椅子からすべり落ちて鼾をかきながら寝てしまい、急患で運ばれて入院した病院では「アルツハイマーが相当進行していて家族一人で面倒を見るのは無理」と指摘されました。改めて申請した介護認定は、わずか1ヵ月間で要介護4になっていました。

また言動は、日を追っておかしくなりました。例えば突然、「仕事の電話がある」と言って受話器を取り、「名古屋に外国船が入るから、バナナ800キロ積んでくれ、頼んだよ△△君」っていう指示を電話口で話しているんです。言動だけ取れば立派な貿易商と映るでしょうが、△△さんは、すでに何年か前に亡くなっているんですよ。

加えて徘徊がひどくなると、信号無視をしたり、紙幣を生ごみとして平気で捨ててしまったりと、父の危険もさることながら、周囲の方にも迷惑を及ぼす恐れが増えるようになりました。

その段階になると、いよいよ「私一人では手に負えない」と決断し、05年11月に区役所に行って相談しました。私はすでに自信も失いつつあったので、藁にもすがるように事情を話すと、区役所のケースワーカーの方がすぐに動いてくださり、望外にも12月に入院が決まりました。

「お前は誰だ?」「パスポートを見せろ」に絶句

介護を続けていて一番悲しかった経験は、父が実の子である私に面と向かって「お前は誰だ?」と言ったことです。「パスポートを見せろ」とまで言われた時には、悔しくて仕方ありませんでした。なので、ムキになって「美江でしょ!そんなこともわからないの!」と叫んでしまいました。

その頃はといえば、病気が進行して目に見えていろいろなところが大きく変わりつつあった時期で、もともと身だしなみには細心の注意を払っていた父の服装が、日を負うごとに、どう見てもおかしな格好で身を包むようになっていきました。そういった姿を直視できないがために、父が奔放な物言いや物忘れなどをすると、どうしても辛く当たってしまいました。

その際、いちばん頼りになったのは、T先生です。先生は父の大のお気に入りで、たくさんのアドバイスをいただきました。週に3回、点滴と称して父を通わせるように心配りをしてくださり、状況に応じた的確なアドバイスをしていただきました。人間味にあふれた方で、世間話をしながら、あわせて父の服装や言動などをご自分なりに観察してくださり、父のために今何ができるかを考え、親身になって相談に乗ってくださいました。

「お前は誰だ?」と言われた時も、すぐさま泣きながら相談に行ったのですが、先生は父の肩をポーンと叩きながら柔らかな物腰で「だめじゃないですか、女性の顔を忘れるなんて」と紳士的に諭して、父への接し方を暗に示してくれました。それ以降は、おかしな言動や行動をいちいち正して詰問をせずに、何事にも腹を立てずに柔和に接するようにしました。また、父が会話を交わすような方々には前もって「実は父がアルツハイマーで……」と事情を説明して、適当な応対をお願いしました。すると、父に近しい方々は、みな一様に優しく接してくださいました。

「来てくれて、ありがとう」の言葉に感じた達成感

介護経験を通じて感じたことは、自分に100%を求めてはいけないことです。特に生真面目な方、一人で悩みなどを抱え込む性格の方は、決して100%を求めない。

そして、介護をしている患者さんが認知症の場合、厳しくきつくあたることが最も避けるべきことだと思います。理不尽なことを言っても「そうね、そうね」と否定せずに優しく接していることで介護する方もリラックスできますし、ストレスも溜まりません。不謹慎かもしれませんが、半ば遊び感覚で接しないと、身の回りの世話はやっていけません。

また、経済的な負担が増えることは避けられません。いざという時のために、保険は入っていたほうがいいと思います。父の場合は保険に入っていましたが、それでさえ収支の算段ややりくりの大変さが思い出として残ってますから。

父の場合は、私なりにベストが尽くせたと思うので、介護できて良かったという達成感があります。父と最後に交わした会話は、雨の日の別れ際に「送っていくよ」と言ってくれたので、「うん。でも、今日はいいわよ」と返したら、「来てくれて、ありがとう」と、父にしては珍しく感謝の気持ちを言葉に表してくれました。なので、より一層、達成感のようなものを感じたのかもしれません。(談)

新しい発想の介護保険
セント・プラスの ちょこっと プラス

- 要介護認定を受けても加入できます。
  初回契約は要介護2まで、再契約は要介護3以上でも可能。
- 100歳まで加入出来ます。
- 実際のサービスを受けてからその費用を補償する形の給付金で、要介護3以上になり各保険のサービスが必要と当社が認めた場合に支払います。